

## 「すべての人々のために」

私たちは様々なことを神に祈り願います(「僕とあなたの民イスラエルがこの所に向かって祈り求める願いを聞き届けてください。どうか、あなたのお住まいである天から耳を傾け、聞き届けて、罪を赦してください。」歴代誌下6:21)。「健康でいられますように」「成績が上がりますように」「旅路をお守りください」等々。その祈りが聞き届けられる時もあるれば、一顧だにされない時もあります。それでも私たちは神に祈り続けます。それは、祈りは必ず聞かれていると知っているからです(「あなたに向かって両手を広げ／渴いた大地のようなわたしの魂を／あなたに向けます。」詩編143:6)。

「そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい」(テモテへの手紙一 2:1)。パウロは手紙を通して「すべての人々のために」祈りなさいと勧めています。「王たちやすべての高官のためにも」(テモテへの手紙一 2:2)とも。「何をそんな当たり前のことを」と思うかもしれません。しかし、考えてみていただきたいのです。この「すべての人々」には自分に敵対する人も含まれているということを。自分たちを迫害する人も含まれているということを。「すべての人々のために」祈ることは思うよりも簡単なことではなかったはずなのです。

アフリカの小国ルワンダでは1994年に大規模なジェノサイド(集団殺戮)がありました。今もその時の記憶が消えない者たちがたくさんおられます。

その中で、和解と生活向上を目指して被害者側も加害者側も共に手を携えて活動する「ウムチョ・ニャンザ」という女性グループがあります。今年の追悼集会には大学生も参加したのですが、こんな質問をしたそうです。「私の両親は二人とも虐殺生存者です。ウムチョ・ニャンザの方々の働きを通して和解は可能だと思える一方、両親からこれまで聞いてきたことを考えると、実際には加害者との和解は無理だと思えるのです。」

それに対してメンバーのフランソワーズさんは次のように応えました。彼女は「学生二人を呼び出して二人を背中合わせに立たせ、二人のお腹の辺りをスカーフで結びあわせました。そして一方の学生に前に進むように指示しました。もちろん、なかなか前に進めません。彼女はこれが『赦せないでいる状況だ』というのです。どこに行くにも何をするにも、赦せない相手があなたについて周り、そのことがあなたの重荷になっているのだと。だから、自らこの二人を縛り付けているものを解いて、自由になることが大切で、それは相手が謝罪しなくてもできることなのだと言明してくださいました。そして自ら手放した重荷は、相手(加害者自身)のもとに残ることになるのだと付け加えたのです。」

人間の思いだけでは「赦せない」となるところを神に委ね、重荷を下ろしたから、自分はここで生きていること。そして、被害者も加害者も、相手のために祈りながら、共に手を携えて働くこと。その繰り返しこそ、「私たちが、常に敬虔と気品を保ち、穏やかで静かな生活を送る」(テモテへの手紙一 2:2、聖書協会共同訳)ことへとつながっていくと彼女は身を以て示してくれているのです。

この姿は私たちを勇気づけます。私たちも「すべての人々のために」祈ることができるようにされていると気づかされるからです。もちろん、その時に祈るのは祝福であって呪いではありません。たとえ自分と「合わない」人であったとしても、その人のために祝福を祈りましょう。いつかその人も私のために祝福を祈ってくれる日が来ると信じて祈り続けるのです(「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。」マタイによる福音書7:12)。

この祈りこそが、十字架上でもなおすべての人々の赦しを祈られたイエスの思いに応える、ただ一つの道を歩むことにつながっています(「そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。』」ルカによる福音書23:34)。誰一人として切り捨てることなく寄り添い続けられたイエスの思いに応じて、私たちは「すべての人々のために」今日も祈り、平和を求めて働くのです。

